

政直隠居の節に
贈られた刀

土浦藩土屋家の二代藩主政直は、貞享4(1687)年から享保4(1719)年までの32年間、幕府の老中を務めていました。老中は、大名支配など幕府の全国支配権に関する政務を担う重職です。定員は4〜5人で、三万石以上十萬石以下の城主(延宝期以降1673年)が就任するのが原則でした。江戸時代を通じて平均就任期間は約10年といわれていますから、政直は平均よりもかなり長い期間務めたといえます。そして、政直が79歳で老中を辞任した際に、大名家七家から刀剣が贈られてきました。そのうち3口を博物館が所蔵しています。土屋家の刀剣台帳である「御腰物」には、「御隠居之節」と書かれた脇に贈り主の名が記されていて、政直が老中を辞任した際に誰から贈られてきたかが分かります。

次に、土屋家に刀剣を贈った大名家についてご紹介しましょう。備前景光の刀を贈った井伊掃部頭直諒(彦根藩三十万石)は、元禄8(1695)年に老中、同10年に大老となっています。一時、隠居しましたが、後代の藩主が早世したため再び藩主となり大老にも再任されて、正徳4(1714)年に隠居しています。

越中則重の小脇指(短刀)を贈った中納言徳川宗直(紀州藩五十五万五千石)は、伊予西条藩三万石の藩主でしたが、正徳6年に紀州藩五代徳川吉宗が八代將軍となったため、紀州藩主となった人物です。

備前包平(博物館蔵)の刀を贈った柳沢美濃守吉保(甲府藩十五万一千石)は、元禄7年に老中格、宝永3(1706)年に大老格となり、同6年に隠居しています。また、吉保の娘と政直の嫡子定直は婚約をしています(定直が早世したため興入れは実現しませんでした)。

左吉貞(博物館蔵)の刀を贈った松平出羽守清武は、甲府藩主徳川綱重の次男で六代將軍家宣の弟です。初め家臣の越智家三百石の家督を継ぎましたが、宝永4年に二万四千石の大名として館林藩主となり、正徳2年に家宣が没すると家宣の遺命により加増を受けて五万四千石となりました。来国光の刀を贈った松平丹後守重榮(二代藩主、杵築藩三万二千石)は、宝永5年に隠居して、実際に刀を贈ったのは正徳5年に四代藩主となった親純と思われる。重榮の母は松平康信の娘であることから、重榮は政直(政直の正室は康信の娘)の甥にあたります。

備前信房(博物館蔵)の刀を贈ったのは、松平新太郎こと池田光政(初代藩主、岡山藩三十一万五千石)ですが、光政は天和2(1682)年に亡くなっていて、子の綱政も正徳4年に77歳で没しています。また、綱政の長男吉政は18歳で没し、次男軌隆は病により家督を継げず、三男政順は14歳で没しています。そして、四男の継政は正徳4年の15歳のときに、奏者番土井山城守利意に病(健康面で藩主を引き継ぐことができるかどうか)を問われています。結果、継政は無事池田家を継いで三代藩主となり、この刀を新太郎の名義で贈ってきたのです。

吉岡一文字の刀を贈った細川越中守宣(熊本藩五十四万石)は、三代綱利の嫡子が亡くなったことから、正徳2年に養子となって家督を継いでいます。

老中内の席次は、先任者順を原則としていて、長く務めるほどに序列が上がっていきます。前述の大名家と政直の係わりを年代的にみても、政直が老中職の経験を経た20年近く経た宝永年間(1704〜1710)から正徳年間(1711〜1715)の間に、刀を贈ってきた大名家において藩主の代替り、転封、石高加増など、藩にとって大変重要な転機が訪れています。いずれの藩も御家安泰と喜ばしい結果となっていて、これらのことと政直「御隠居之節」に贈られた刀剣との関係はどのような意味があるのでしょうか。

いずれにせよ「御腰物」と土屋家刀剣は、大名間の刀剣贈答における意味を明らかにするうえで、全国的にも大変貴重な資料といえます。博物館で所蔵する「御隠居之節」の刀3口は、第30回企画展で11月9日(日)まで公開しています(重要文化財「信房作」は10月28日(火)から)。

市立博物館 (☎824・2928)

◀「信房作」
(重要文化財)
岡山藩池田家より

▶「御腰物」▶

